

# 源氏物語

末摘花

紫式部

青空文庫



皮ごろも上に着たれば我妹子わぎもこは聞くこ

とのみな身に沁しまぬらし  
(晶子)

源氏の君の夕顔を失った悲しみは、月がたち年が変わっても忘れることができなかった。左大臣家にいる夫人も、六条の貴女きじよも強い思い上がりと源氏の他の愛人を寛大に許すことのできない気むずかしさがあって、扱いにくいことによつても、源氏はあの気楽な自由な気持ちを与えてくれた恋人ばかりが追慕されるのである。どうかしてたいそうな身分のない女で、可憐かれんで、そして世間的にあまり恥ずかしくもないような恋人を見つけないと懲りもせ

ずに思っている。少しよいらしく言われる女にはすぐに源氏の好奇心は向く。さて接近して行こうと思うのにはまず短い手紙などを送るが、もうそれだけで女のほうからは好意を表してくる。冷淡な態度を取りうる者はあまりなさそうなのに源氏はかえって失望を覚えた。ある場合条件どおりなのがあつても、それは頭に欠陥のあるのとか、理智りち一方の女であつて、源氏に対して一度は思ひ上がった態度に出ても、あまりにわが身知らずのようであるとか思い返してはつまらぬ男と結婚をしまつたりするものもあつたりして、話をかけたままになつていく向きも多かつた。空蟬うつせみが何かのおりおりに思い出されて敬服するに似た気持ちもおこるのであつた。軒端のきばの荻おぎへは今も時々手紙が送られることと思われ

る。灯影ほかげに見た顔のきれいであつたことを思い出しては情人としておいてよい気が源氏にするのである。源氏の君は一度でも關係を作つた女を忘れて捨ててしまふようなことはなかつた。

左衛門さえもんの乳母めのとといつて、源氏からは大弐だいにの乳母の次にいたわられていた女の、一人娘は大輔たゆうの命婦みょうぶといつて御所勤めをしていた。王氏の兵部ひょうぶ大輔である人が父であつた。多情な若い女であつたが、源氏も宮中の宿直所とのいどころでは女房のようにして使つていた。左衛門の乳母は今は筑前守ちくぜんのかみと結婚して、九州へ行つてしまつたので、父である兵部大輔の家を実家として女官を勤めていたのである。常陸ひたちの太守であつた親王（兵部大輔はその息そくである）が年をおとりになつてからお持ちになつた姫君が孤児になつて残

っていることを何かのついでに命婦が源氏へ話した。気の毒な気がして源氏は詳しくその人のことを尋ねた。

「どんな性質でいらつしやるとか御容貌ごきりようのこととか、私はよく知らないのでございます。内気なおとなしい方ですから、時々は几帳越きちょうしくらいのことでお話をいたします。琴きんがいちばんお友だちらしゅうございます」

「それはいいことだよ。琴と詩と酒を三つの友というのだよ。酒だけはお嬢さんの友だちにはいけないがね」

こんな冗談じょうだんを源氏は言つたあとで、

「私にその女王さんの琴の音を聞かせないか。常陸の宮さんは、そうした音楽などのよくできた方らしいから、平凡な芸ではなか

ろうと思われる」

と言った。

「そんなふうにおぼしめ思召してお聞きになります価値がございますか、  
どうか」

「思わせぶりをしないでいいじゃないか。このごろは朧月  
があるからね、そつと行ってみよう。君も家へ退つていってくれ」

源氏が熱心に言うので、大輔の命婦は迷惑になりそうなのを恐れながら、御所も御用のひまな時であったから、春のひなが退出をした。父の大輔は宮邸には住んでいないのである。その継母の家へ出入りすることをきらつて、命婦は祖父の宮家へ帰るのである。

源氏は言っていたように十六夜の月の朧ろに霞んだ夜に命婦を訪問した。

「困ります。こうした天気は決して音楽に適しませんのですもの」  
「まあいいから御殿へ行って、ただ一声でいいからお弾かせしてくれ。聞かれないで帰るのではあまりつまらないから」

と強いて望まれて、この貴公子を取り散らした自身の部屋へ置いて行くことを済まなく思いながら、命婦が寝殿へ行ってみると、まだ格子をおろさないで梅の花のおう庭を女王はながめていた。よいところであると命婦は心で思った。

「琴の声が聞かせていただけましたらと思うような夜分でございますから、部屋を出てまいりました。私はこちらへ寄せていただ



いていまして、いつも時間が少なくて、伺わせていただく間のないのが残念でなりません」

と言うと、

「あなたのような批評家がいれば手が出せない。御所に出ている人などに聞いてもらえる芸なものですか」

こう言いながらも、すぐに女王が琴を持って来させるのを見ると、命婦がかえつてはつとした。源氏の聞いていることを思うからである。女王はほのかな爪つまもと音を立てて行った。源氏はおもしろく聞いていた。たいした深い芸ではないが、琴の音というものは他の楽器の持たない異国風な声であったから、聞きにくくは思わなかった。この邸やしきは非常に荒れているが、こんな寂しい所に女

王の身分を持っていて、大事がられた時代の名残なごりもないような生活をするのでは、どんなに味気ないことが多かろう。昔の小説にもこんな背景の前によく佳人が現われてくるものなどと源氏は思つて今から交渉の端緒を作ろうかとも考えたが、ぶしつけに思われることが恥ずかしくて座を立ちかねていた。

命婦は才気のある女であつたから、名手の域に遠い人の音楽を長く源氏に聞かせておくことは女王の損になると思つた。

「雲が出て月が見えないがちの晩でございますわね。今夜私のほうへ訪問してくださるお約束の方がございましたから、私がおられませんとわざと避けたようにも当たりますから、またゆるりと聞かせていただきます。お格子をおろして行きましょう」

命婦は琴を長く弾かせないで部屋へ帰った。

「あれだけでは聞かせてもらいがいもない。どの程度の名手なのかわからなくてつまらない」

源氏は女王に好感を持つらしく見えた。

「できるなら近いお座敷のほうへ案内して行ってくれて、よそながらでも女王さんの衣摺きぬずれの音のようなものを聞かせてくれないか」

と言った。命婦は近づかせないで、よりよい想像をさせておきたかった。

「それはだめでございますよ。お気の毒なお暮らしをして、めいりこんでいらっしやる方に、男の方を御紹介することなどはでき

ません」

と命婦の言うのが道理であるように源氏も思った。男女が思いがけなく会合して語り合うというような階級にははいらない、ともかくも貴女なんであるからと思つたのである。

「しかし、将来は交際ができるように私の話をしておいてくれ」  
こう命婦に頼んでから、源氏はまた今夜をほかに約束した人があるのか歸つて行こうとした。

「あまりにまじめ過ぎるからと陛下がよく困るようにおっしゃつていらつしやいますのが、私にはおかしくてならないことがおりおりございます。こんな浮気うわきなお忍び姿を陛下は御覧になりませんからね」

と命婦が言うと、源氏は二足三足帰つて来て、笑いながら言う。「何を言うのだね。品行方正な人間でも言うように。これを浮氣うわきと言つたら、君の恋愛生活は何なのだ」

多情な女だと源氏が決めていて、おりおりこんなことを面と向かつて言われるのを命婦は恥ずかしく思つて何とも言わなかつた。

女暮らしの家の座敷の物音を聞きたいように思つて源氏は静かに庭へ出たのである。大部分は朽ちてしまったあとの少し残つた透すいがき垣のからだが隠せるほどの蔭かげへ源氏が寄つて行くと、そこに以前から立つていた男がある。だれであろう女王に恋をする好色男があるのだと思つて、暗いほうへ隠れて立つていた。初めから庭にいたのは頭とうのちゆうじょう中將なかつしやうなのである。今日きようも夕方御所を同時に

退出しながら、源氏が左大臣家へも行かず、二条の院へも帰らないで、妙に途中で別れて行ったのを見た中将が、不審を起こして、自身のほうにも行く家があったのを行かずに、源氏のあとについて来たのである。わざと貧弱な馬に乗って狩かりぎぬ衣姿ぬをしていた中将に源氏は気づかなかつたのであつたが、こんな思いがけない邸やしきへはいつたのがまた中将の不審を倍にして、立ち去ることができなかつたところに、琴を弾く音ねがしてきたので、それに心も惹ひかれて庭に立ちながら、一方では源氏の出て来るのを待つていた。源氏はまだだれであるかに気がつかないで、顔を見られまいとして抜き足をして庭を離れようとする時にその男が近づいて来て言つた。

「私をお撒まきになつたのが恨めしくて、こうしてお送りしてきたのですよ。

もろともに大内山は出いでつれど入る方見せぬいざよひの月」

さも秘密を見現わしたように得意になつて言うのが腹だたしかつたが、源氏は頭中将であつたことに安心もされ、おかしくなりもした。

「そんな失敬なことをする者はあなたのほかにありませんよ」  
憎らしがりながらまた言つた。

「里分かぬかげを見れども行く月のいるさの山を誰たれかたづぬる  
こんなふうに私が始終あなたについて歩いたらお困りになるで  
しょう、あなたはね」

「しかし、恋の成功はよい隨身をつれて行くか行かないかで決ま  
ることもあるでしょう。これからはごいっしよにおつれください。  
お一人歩きは危険ですよ」

頭中将はこんなことを言った。頭中将に得意がられていること  
を源氏は残念にも思ったが、あの撫なでしこ子の女が自身のものになつ  
たことを中将が知らないことだけが内心には誇らしかった。源氏  
にも頭中将にも第二の行く先は決まっていたが、戯じょうだん談を言い



合つてゐることがおもしろくて、別れられずに一つの車に乗つて、  
朧おぼろづきよ月夜の暗くなつた時分に左大臣家に來た。前驅のうしに声も立てさせずに、そつとはいつて、人の來ない廊の部屋で直衣のうしに着かえな  
どしてから、素知らぬ顔で、今來たように笛を吹き合ひながら源  
氏の住んでゐるほうへ來たのである。その音ねに促ねされたように左  
大臣は高麗こまぶえ笛を持つて來て源氏へ贈つた。その笛も源氏は得意で  
あつたからおもしろく吹いた。合奏のために琴も持ち出されて女  
房の中でも音楽のできる人たちが選ばれて弾ひき手なつたになつた。琵琶びわ  
が上じょうず手である中將という女房は、頭中將に恋をされながら、そ  
れにはなびかないで、このたまさかにしか來ない源氏の心にはた  
やすく従つてしまつた女であつて、源氏との關係がすぐに知れて、

このごろは大臣の夫人の内親王様も中將を快くお思いにならなくなつたのに悲觀して、今日も仲間から離れて物蔭ものかげで横になつていた。源氏を見る機会のない所へ行つてしまうのもさすがに心細くて、煩悶はんもんをしているのである。楽音の中にいながら二人の貴公子はあの荒れ邸の琴の音を思い出していた。ひどくなつた家もおもしろいもののようにばかり思われて、空想がさまざまに伸びていく。可憐かれんな美人が、あの家の中で埋没されたようになって暮らしていたあとで、発見者の自分の情人にその人がなつたら、自分はまだその人の愛におぼれてしまうかもしれない。それで方々で物議が起こることになつたらまたちよつと自分は困るであろうなどとまで頭中將は思った。源氏が決してただの気持ちであの邸

を訪問したのではないことだけは確かである。先を越すのはこの人であるかもしれないと思うと、頭中將は口惜くちおしくて、自身の期待が危あぶなかしいようにも思われた。

それからのち二人の貴公子が常陸ひたちの宮の姫君へ手紙を送ったことは想像するにかたくない。しかしどちらへも返事は来ない。それが気になって頭中將は、いやな態度だ、あんな家に住んでいない人は、あんな人は物の哀れに感じやすくなっていねばならないはずだ、自然の木や草や空のながめにも心と一致するものを見いだしておもしろい手紙を書いてよこすようであればならない、いくら自尊心のあるのはよいものでも、こんなに返事をよこさない女には反感が起こるなどと思っていらいらとするのだった。仲のよい友

だちであったから頭中将は隠し立てもせず、その話を源氏にするのである。

「常陸の宮の返事が来ますか、私もちよつとした手紙をやったのだけれど何にも言つて来ない。侮辱された形ですね」

自分の想像したとおりだ、頭中将はもう手紙を送っているのだと思うと源氏はおかしかった。

「返事を格別見たいと思わない女だからですか、来たか来なかったかよく覚えていませんよ」

源氏は中将をじらす気なのである。返事の来ないことは同じなのである。中将は、そこへ行きこちらへは来ないのだと口惜くちおしがくちおつた。源氏はたいした執心を持つのでない女の冷淡な態度に厭いや気き

がして捨てて置く気になっていたが、頭中将の話聞いてからは、  
くちじょうず口上手な中将のほうに女は取られてしまうであろう、女はそれ  
で好い気になって、初めの求婚者のことなどは、それは止よしてし  
まったと冷ややかに自分を見くびるであろうと思うと、あるもど  
かしさを覚えたのである。それから大輔たゆうの命婦みょうぶにまじめに仲介  
を頼んだ。

「いくら手紙をやっても冷淡なんだ。私がただ一時的な浮気うわきで、  
そうしたことを言っているのだと解釈しているのだね。私は女に  
対して薄情なことのできる男じゃない。いつも相手のほうが気短  
に私からそむいて行くことから悪い結果にもなつて、結局私が捨  
ててしまったように言われるのだよ。孤独の人で、親や兄弟が夫

婦の中を干渉するようならさうでもない、気楽な妻が得られ  
たら、私は十分に愛してやることができるのだ」

「いいえ、そんな、あなた様が十分にお愛しになるようなお相手  
にあの方はなられそうもない気がします。非常に内気で、おとな  
しい点はちよつと珍らしいほどの方ですが」

命婦は自分の知っているだけのことを源氏に話した。

「貴婦人らしい聡明そうめいさなどが見られないのだろう、いいのだよ、  
無邪気でおっとりとしていれば私は好きだ」

命婦あに逢えばいつもこんなふうあに源氏は言っていた。その後源

氏は瘡病わらわやみになつたり、病気がなおると少年時代からの苦しい

恋の悩みに世の中に忘れてしまふほどに物思いをしたりして、こ

の年の春と夏とが過ぎてしまった。秋になって、夕顔の五条の家で聞いた砧きぬたの耳についてうるさかったことさえ恋しく源氏に思い出されるころ、源氏はしばしば常陸の宮の女王へ手紙を送った。返事のないことは秋の今も初めに変わらなかつた。あまりに人並みはずれな態度をとる女だと思つと、負けたくないというような意地も出て、命婦へ積極的に取り持ちを迫ることが多くなつた。「どんなふうに思っているのだろう。私はまだこんな態度を取り続ける女に出逢つたことはないよ」

不快そうに源氏の言うのを聞いて命婦も気の毒がった。

「私は格別この御縁はよろしくございませんとも言つておりませんよ。ただあまり内氣過ぎる方で男の方との交渉に手が出ないの

でしようとお返事の来ないことを私はそう解釈しております」  
「それがまちがっているじゃないか。とても年が若いとか、また親がいて自分の意志では何もできないというような人たちこそ、それがもつともだとは言えるが、あんな一人ぼっちの心細い生活をしている人というものは、異性の友だちを作つて、それから優しい慰めを言われたり、自分のことも人に聞かせたりするのがよいことだと思ふがね。私はもう面倒めんどうな結婚なんかどうでもいい。あの古い家を訪問して、気の毒なような荒れた縁側へ上がつて話すだけのことをさせてほしいよ。あの人がよいと言わなくても、ともかくも私をあの人に接近させるようにしてくれないか。気短になつて取り返しのないような行爲に出るようなことは断じ



てないだろう」

などと源氏は言うのであつた。女の噂うわさを関心も持たないように聞いていながら、その中のある者に特別な興味を持つような癖が源氏にできたころ、源氏の宿直所とのいどころのつれづれな夜話に、命婦が何の気なしに語つた常陸の宮の女王のことを始終こんなふうに責任のあるもののように言われるのを命婦は迷惑に思つていた。女王の様子を思つてみると、それが似つかわしいこととは仮にも思えないのであつたから、よけいな媒介役を勤めて、結局女王を不幸にしてしまうのではないかとも思えたが、源氏がきわめてまじめに言い出していることであつたから、同意のできない理由もまたない気がした。常陸の太守の宮が御在世中みよでも古い御代の残り

の宮様として世間は扱つて、御生活も豊かでなかつた。お訪ねす<sup>たず</sup>る人などはその時代から皆無といつてよい状態だつたのだから、今になつてはまして草深い女王の邸へ出入りしようとする者はなかつた。その家へ光源氏の手紙が来たのであるから、女房らは一陽来復の夢を作つて、女王に返事を書くことも勧めたが、世間のあらゆる内気の人の中の最も引つ込み思案の女王は、手紙に語られる源氏の心に触れてみる気も何もなかつたのである。命婦はそんなに源氏の望むことなら、自分が手引きして物越しにお逢わせしよう、お氣に入らなければそれきりにすればいいし、また縁があつて情人関係になつても、それを干渉して止める人は宮家にないわけであるなどと、命婦自身が恋愛を軽いものとして考えつけ

ている若い心に思つて、女王の兄にあたる自身の父にも話しておこうとはしなかつた。

八月の二十日過ぎである。八、九時にもまだ月が出ずに星だけが白く見える夜、古い邸やしきの松風が心細くて、父宮のことなどを言い出して、女王は命婦といて泣いたりしていた。源氏に訪ねて来させるのによいおりであると思つた命婦のしらせが行つたか、この春のようにそつと源氏が出て来た。その時分になつて昇のぼつた月の光が、古い庭をいつそう荒涼たるものに見せるのを寂しい気持ちで女王がながめていると命婦が勧めて琴を弾かせた。まずくはない、もう少し近代的の光沢が添つたらいいだろうなどと、ひそかなことを企てて心の落ち着かぬ命婦は思つていた。人のあまり

いない家であつたから源氏は氣樂に中へはいつて命婦を呼ばせた。命婦ははじめて知つて驚くというふうに見せて、

「いらつしたお客様つて、それは源氏の君なんですよ。始終御交際をする紹介役をするようにつてやかましく言つていらつしやるのですが、そんなことは私にだめでございますつてお断わりばかりしておりますの、そしたら自分で直接お話しに行くつてよくおつしやるのです。お歸しはできませんわね。ぶしつけをなさるような方なら何ですが、そんな方じゃございません。物越しでお話しておあげになることだけを許してあげてくださいませいなね」

と言うと女王は非常に恥ずかしかつて、

「私はお話のしかたも知らないのだから」

と言いながら部屋の奥のほうへ膝行いざつて行くのがういういしく見えた。命婦は笑いながら、

「あまりに子供らしくいらつしやいます。どんな貴婦人といいましても、親が十分に保護していただく間だけは子供らしくして置いてよろしくても、こんな寂しいお暮らしをしていらつしやりながら、あまりあなたのように羞しゆうち恥の觀念の強いことはまちがつています」

こんな忠告をした。人の言うことにそむかれない内気な性質の女王は、

「返辞をしないでただ聞いてだけいてもいいというのなら、格子でもおろしてここにいていい」

と言つた。

「縁側におすわらせすることなどは失礼でございます。無理なこととは決してなさいませんでしよう」

体裁よく言つて、次の室との間の襖からかみ子を命婦自身が確かに閉めて、隣室へ源氏の座の用意をしたのである。源氏は少し恥ずかしい気がした。人としてはじめて逢あう女にはどんなことを言つてよいかを知らないが、命婦が世話をしてくれるであろうと決めて座についた。乳母のような役をする老女たちは部屋へはいつて宵よいまだいまだ惑まどいの目を閉じているころである。若い二、三人の女房は有名な源氏の君の来訪に心をときめかせていた。よい服に着かえさせられながら女王自身は何の心の動揺もなさそうであつた。男はも

とよりの美貌を<sup>びぼう</sup>目だたぬように化粧して、今夜はことさら艶<sup>えん</sup>に見えた。美の価値のわかる人などのいない所だのにと命婦は気の毒に思った。命婦には女王がただおおうにしているに相違ない点だけが安心だと思われた。会話に出過ぎた失策をしそうには見えないからである。自分の責めのがれにしたことで、気の毒な女王をいつそう不幸にしないだろうかという不安はもっていた。源氏は相手の身柄を尊敬している心から利巧<sup>りこう</sup>ぶりを見せる洒落<sup>しやれぎ</sup>気の多い女よりも、気の抜けたほどおおうなこんな人のほうが感じがよいと思っていたが、襖子の向こうで、女房たちに勧められて少し座を進めた時に、かすかな衣被香<sup>えびこう</sup>のにおいがしたので、自分の想像はまちがっていかなかったと思い、長い間思い続けた恋であつ

たことなどを上手じょうずに話しても、手紙の返事をしない人からはまた口ずからの返辞を受け取ることができなかつた。

「どうすればいいのです」

と源氏は歎息たんそくした。

「いくそ度君たびが沈黙しじまに負けぬらん物ない云いひそと云はぬ頼みに

言いきつてくださいませんか。私の恋を受けてくださるのか、受けてくださらないかを」

女王の乳母の娘で侍従という気さくな若い女房が、見かねて、女王のそばへ寄つて女王らしくして言った。



鐘つきてとぢめんことはさすがにて答へまうきぞかつはあやなき

若々しい声で、重々しくものの言えない人が代人でないようにして言ったので、貴女きしよとしては甘つたれた態度だと源氏は思ったが、はじめて相手にものを言わせたことがうれしくて、

「こちらが何とも言えなくなります、

云いはぬをも云まふに勝まると知りながら押しこめたるは苦しかり

けり」

いろいろと、それは実質のあることではなくても、誘惑的にも  
まじめにも源氏は語り続けたが、あの歌きりほかの返辞はなかつ  
た、こんな態度を男にとるのは特別な考えをもっている人なんだ  
ろうかと思うと、源氏は自身が軽侮されているような口惜くちおしい気  
がした。その時に源氏は女王の室のほうへ襖からかみ子をあけてはいつ  
たのである。命婦はうかうかと油断をさせられたことで女王を気  
の毒に思うと、そこにもおられなくて、そしらぬふうをして自身  
の部屋のほうへ帰った。侍従などという若い女房は光源氏という  
ことに好意を持っていて、主人をかばうことにもたいして力が出  
なかつたのである。こんなふうになんの心の用意もなくして結婚して

しまう女王に同情しているばかりであつた。女王はただ羞恥しゆうちの中ちゆうにうずもれていた。源氏は結婚の初めのうちはこんなふうである女がよい、独身で長く大事がられてきた女はこんなものであると酌しやく量りやうして思いながらも、手探りに知つた女の様子に腑ふに落ちぬところもあるようだつた。愛情が新しく湧わいてくるようなことは少しもなかつた。歎息たんそくしながらまだ暁方に帰ろうと源氏はした。命婦はどうなつたかと一夜じゆう心配で眠れなくて、この時の物音も知つていたが、黙もくつてゐるほうがよいと思つて、「お送りいたしましょう」と挨拶あいさつの声も立てなかつた。源氏は静かに門を出て行つたのである。

二条の院へ歸つて、源氏は又寝またねをしながら、何事も空想したよ

うにはいかないものであると思つて、ただ身分が並み並みの人でないために、一度きりの関係で退のいてしまうような態度の取れない点を煩悶はんもんするのだった。そんな所へ頭とうのちゆう中将じゆうじやうが訪問してきた。

「たいへんな朝寝なんですね。なんだかわけがありそうだ」と言われて源氏は起き上がった。

「気楽な独り寝ひとなものですから、いい気になつて寝坊をしてしまいましたよ。御所からですか」

「そうです。まだ家へ帰うちっていないのですよ。朱雀院すざいくの行幸の日の楽の役と舞まいの役の人選が今日あるのだそうですから、大臣にも相談しようと思つて退出したのです。そしてまたすぐに御所へ帰

ります」

頭中将は忙しそうである。

「じやあいつしよに行きましよう」

こう言つて、源氏は粥かゆや強飯こわめしの朝食を客とともに済ませた。

源氏の車も用意されてあつたが二人は一つの車に乗つたのである。あなたは眠そうだと中将は言つて、

「私に隠すような秘密をあなたはたくさん持つていそうだ」  
とも恨んでいた。

その日御所ではいろんな決定事項が多くて源氏も終日宮中で暮らした。新郎はその翌朝に早く手紙を送り、第二夜からの訪問を忠実に続けることが一般の礼儀であるから、自身で出かけられな

いまでも、せめて手紙を送つてやりたいと源氏は思つていたが、  
閑暇ひまを得て夕方に使いを出すことができた。雨が降つていた。こ  
んな夜にちよつとでも行つてみようというほどにも源氏の心を惹ひ  
くものは昨夜の新婦に見いだせなかつた。

あちらでは時刻を計つて待つていたが源氏は来ない。命婦みようぶも  
女王をいたましく思つていた。女王自身はただ恥はずかしく思つて  
いるだけで、今朝来るべきはずの手紙が夜になつてまで来ないこ  
とが何の苦勞にもならなかつた。

夕霧の晴るるけしきもまだ見ぬにいぶせさ添よひふる宵の雨かな

この晴れ間をどんなに私は待ち遠しく思うことでしよう。

と源氏の手紙にはあつた。来そうもない様子に女房たちは悲観した。返事だけはぜひお書きになるようにと勧めても、まだ昨夜から頭を混乱させている女王は、形式的に言えばいいこんな時の返歌も作れない。夜が更ふけてしまうと侍従が氣をもんで代作した。

晴れぬ夜の月待つ里を思ひやれ同じ心にながめせずとも

書くことだけは自身でなければならぬと皆から言われて、紫色の紙であるが、古いので灰色がかつたのへ、字はさすがに力の

ある字で書いた。中古の書風である。一所も散らしては書かず上  
下そろえて書かれてあつた。

失望して源氏は手紙を手から捨てた。今夜自分の行かないこと  
で女はさぞ煩悶はんもんをしていであらうとそんな情景を心に描いて  
みる源氏も煩悶はんもんはしているのだつた。けれども今さらしかたのな  
いことである、いつまでも捨てずに愛してやろうと、源氏は結論  
としてこう思つたのであるが、それを知らない常陸ひたちの宮家の人々  
はだれもだれも暗い気持ちから救われなかつた。

夜になつてから退出する左大臣に伴われて源氏はその家へ行つ  
た。行幸の日を楽しみにして、若い公きん達が集まるとその話が出  
る。舞曲の勉強をするのが仕事のようになっていたころであつた



から、どこの家でも楽器の音をさせているのである。左大臣の子息たちも、平生の楽器のほかのおおひちりき大筆策、尺八などの、大きいものから太い声をたてる物も混ぜて、大がかりの合奏の稽古けいこをしていた。太鼓までも高欄の所へころがしてきて、そうした役はせぬことになっていゝる公達が自身でたたいたりもしていた。こんなことで源氏も毎日閑暇ひまがない。心から恋しい人の所へ行く時間を盗むことはできても、常陸の宮へ行つてよい時間はなくて九月が終わってしまった。それでいよいよ行幸の日が近づいて来たわけで、試楽とか何とか大騒ぎするころに命婦みょうぶは宮中へ出仕した。

「どうしているだろう」

源氏は不幸な相手をあわれむ心を顔に見せていた。大輔たゆうの命婦

はいろいろと近ごろの様子を話した。

「あまりに御冷淡です。その方でなくても見ているものがこれではたまりません」

泣き出しそうにまでなっていた。悪い感じも源氏にとめさせないで、きれいに結末をつけようと願っていたこの女の意志も尊重しなかつたことで、どんなに恨んでいるだろうとさえ源氏は思った。またあの人自身は例の無口なままで物思いを続けていることであろうと想像されてかわいそうであつた。

「とても忙しいのだよ。恨むのは無理だ」

たんそく  
歎息をして、それから、

「こちらがどう思っても感受性の乏しい人だからね。懲らそうと

も思つて」

こう言つて源氏は微笑を見せた。若い美しいこの源氏の顔を見ていると、命婦も自身までが笑顔えがおになつていく気がした。だれからも恋の恨みを負わされる青春を持つていらつしやるのだ、女に同情が薄くて我わがまま儘をするのも道理なのだと思つた。この行幸準備の用が少なくなつてから時々源氏は常陸の宮へ通つた。そのうち若紫を二条の院へ迎えたのであつたから、源氏は小女王を愛することに没頭して、六条の貴女に逢うことも少なくなつていた。人の所へ通つて行くことは始終心にかけてながらもおつくうにばかり思えた。

常陸の女王のまだ顔も見せない深い羞しゆうち恥を取りのけてみよう

とも格別しな<sup>せつな</sup>いで時がたつた。あるいは源氏がこの人を顕<sup>あら</sup>わに見た刹那から好きになる可能性があると<sup>も</sup>言えるのである。手探りに不審な点があるのか、この人の顔を一度だけ見たいと思うこともあつたが、引つ込みのつかぬ幻滅を味わわされることも思うと不安だつた。だれも人の来ることを思わない、まだ深夜にならぬ時刻に源氏はそつと行つて、格子の間からのぞいて見た。けれど姫君はそんな所から見えるものでもなかつた。几帳<sup>きちよう</sup>などは非常に古びた物であるが、昔作られたままに皆きちんとかかつていた。どこからか隙<sup>すき</sup>見ができるかと源氏は縁側をあちこちと歩いたが、隅<sup>すみ</sup>の部屋にだけいる人が見えた。四、五人の女房である。食事台、食器、これらは支那製<sup>しな</sup>のものであるが、古くきたなくなつて見る

影もない。女王の部屋から下げたそんなものを置いて、晩の食事をこの人たちはしているのである。皆寒そうであつた。白い服の何ともいえないほど煤すすけてきたなくなつた物の上に、堅かたぎ気らしく裳もの形をした物を後ろにくくりつけている。しかも古風に髪くしを櫛くしで後ろへ押えた額のかつこうなどを見ると、内ないき教坊ようぼう（宮中の神前奉仕の女房が音楽の練習をしている所）や内ないし侍所じどころではこんなかつこうをした者がいると思えて源氏はおかしかった。こんなふうを人間に仕える女房もしているものとはこれまで源氏は知らなんだ。

「まあ寒い年。長生きをしているとこんな冬にも逢あいますよ」  
 そう言つて泣く者もある。

「宮様がおいでになつた時代に、なぜ私は心細いお家うちだなどと思つたのだらう。その時よりもまたどれだけひどくなつたかかもしれないのに、やつぱり私らは我慢して御奉公している」

その女は両袖そでをばたばたといわせて、今にも空中へ飛び上がつてしまうように慄ふるえている。生活についての剥むき出しな、きまりの悪くなるような話ばかりするので、聞いていて恥ずかしくなつた源氏は、そこから退のいて、今来たように格子をたたいたのであつた。

「さあ、さあ」

などと言つて、灯ひを明るくして、格子を上げて源氏を迎えた。

侍従は一方で齋院さいいんの女房を勤めていたからこのごろは来ていな

いのである。それがいないのでいつそうすべての調子が野暮らし  
かった。先刻老人たちの愁うれえていた雪がますます大降りになつて  
きた。すごい空の下を暴風が吹いて、灯の消えた時にも点つけ直そ  
うとする者はない。某なにがしの院の物もののけ怪の出た夜が源氏に思い出され  
るのである。荒廢のしかたはそれに劣らない家であつても、室の  
狭いのと、人間があの時よりは多い点だけを慰めに思えば思える  
のであるが、ものすごい夜で、不安な思いに絶えず目がさめた。  
こんなことはかえつて女への愛を深くさせるものなのであるが、  
心を惹ひきつける何物をも持たない相手に源氏は失望を覚えるばか  
りであつた。やっと夜が明けて行きそうであつたから、源氏は自  
身で格子を上げて、近い庭の雪の景色けしきを見た。人の踏み開いた跡

もなく、遠い所まで白く寂しく雪が続いていた。今ここから出て行ってしまうのもかわいそうに思われて言った。

「夜明けのおもしろい空の色でもいつしよにおながめなさい。いつまでもよそよそしくしていらつしやるのが苦しくてならない」  
まだ空はほの暗いのであるが、積もった雪の光で常よりも源氏の顔は若々しく美しく見えた。老いた女房たちは目の楽しみを与えられて幸福であった。

「さあ早くお出なさいまし、そんなにしていらつしやるのはいけません。素直になさるのがいいのでございますよ」

などと注意をすると、この極端に内気な人にも、人の言うことは何でもそむけないところがあつて、姿を繕いながら膝いざ行つて出



た。源氏はその方は見ないようにして雪をながめるふうはしな  
らも横目は使わないのでもない。どうだろう、この人から美しい  
所を発見することができたらうれしかろうと源氏の思うのは無理  
な望みである。すわった背中の線の長く伸びていることが第一に  
目へ映った。はつとした。その次に並みはずれなものは鼻だった。  
注意がそれに引かれる。普賢菩薩ふげんぼさつの乗った象という獣が思われる  
のである。高く長くて、先のほうが下に垂たれた形のそこだけが赤  
かった。それがいちばんひどい容きりよう貌の欠陥だと見える。顔色は  
雪以上に白くて青みがあつた。額が腫ふくれたように高いのであるが、  
それでいて下方の長い顔に見えるというのは、全体がよくよく長  
い顔であることが思われる。瘦やせぎすなことはかわいそうなくら

いで、肩のあたりなどは痛かろうと思われるほど骨が着物を持ち上げていた。なぜすつかり見てしまったのであろうと後悔をしなからも源氏は、あまりに普通でない顔に気を取られていた。頭の形と、髪のかかりぐあいだけは、平生美人だと思つている人にもあまり劣つていないようで、裾すそが桂うちぎの裾すそをいっばいにした余りがまだ一尺くらいも外へはずれていた。その女王の服装までも言うのはあまりにはしたくないようではあるが、昔の小説にも女の着ている物のことは真ま先つさきに語られるものであるから書いてもよいかと思う。桃色の変色してしまつたのを重ねた上に、何色かの真ま黒くろに見える桂うちぎ、黒貂くろぎの毛の香のする皮衣を着ていた。毛皮は古風な貴族らしい着用品ではあるが、若い女に似合うはずのもので

なく、ただ目だつて異様だった。しかしながらこの服装でなければ寒気が堪えられぬと思える顔であるのを源氏は気の毒に思つて見た。何ともものが言えない。相手と同じように無言の人に自身までがなつた気がしたが、この人が初めからものを言わなかつたわけも明らかにしようとして何かと尋ねかけた。袖そでで深く口を被おおうているのもたまらなく野暮やぼな形である。自然肱ひじが張られて練つて歩く儀式官の袖が思われた。さすがに笑顔えがおになつた女の顔は品も何もない醜さを現わしていた。源氏は長く見ていることがかわいそうになつて、思つたよりも早く歸つて行こうとした。

「どなたもお世話をする人のないあなたと知つて結婚した私には何も御遠慮なんかなさらないで、必要なものがあつたら言つてく

ださると私は満足しますよ。私を信じてくださらないから恨めしいのですよ」

などと、早く出て行く口実をさえ作って、

朝日さす軒のたるひは解けながらなどかつららの結ほほるらん

と言ってみても、「むむ」と口の中で笑っただけで、返歌の出そうにない様子が気の毒なので、源氏はそこを出て行ってしまった。

中門の車寄せの所が曲がってよろよろになっていた。夜と朝と

は荒廢の度が違つて見えるものである、どこもかしこも目に見える物はみじめでたまらない姿ばかりであるのに、松の木へだけは暖かそうに雪が積もつていた。田舎で見るような身にいなかしむ景色けしきであることを源氏は感じながら、いつか品定めにむぐら葎の門の中ということを入が言つたが、これはそれに相当する家であろう。ほんとうにあの人たちの言つたように、こんな家にかれん可憐な恋人を置いて、いつもその人を思つていたらおもしろいことであろう、自分の、思つてならぬ人を思う苦しみはそれによつて慰められるであろうがと思つて、これは詩的な境遇にいながらなんらの男を引きつける力のない女であると断案を下しながらも、自分以外の男はあの人を終世變わりない妻として置くことはできまい、自分があの人

の良人おつとになつたのも、気がかりにお思ひになつたはずの父宮の靈魂が導いて行つたことであらうと思つたのであつた。うずめられてゐる橘たちばなの木の雪を隨身に払わせた時、横の松の木がうらやましそうに自力で起き上がつて、さつと雪をこぼした。たいした教養はなくてもこんな時に風流を言葉で言いかわす人がせめて一人でもないのだらうかと源氏は思つた。車の通れる門はまだ開あけてなかつたので、供の者が鍵かぎを借りに行くと、非常な老としより人の召使が来て来た。そのあとから、娘とも孫とも見える、子供と大人の間よこくらいの女が、着物は雪との対照であくまできたなく汚よごれて見えるそでようなのを着て、寒そうに何か小さい物に火を入れて袖の中あで持ちながらついて来た。雪の中の門が老人の手で開かぬのを見

てその娘が助けた。なかなか開かない。源氏の供の者が手伝ったのではじめて扉が左右に開かれた。

ふりにける頭かしらの雪を見る人も劣らずぬらす朝の袖かな

と歌い、また、「霰さん雪せつ白はく紛ふん紛ふん、幼えう者しや形はか不ち蔽をおお」と吟

じていたが、白楽天のその詩の終わりの句に鼻のことが言つてあるのを思つて源氏は微笑された。頭中将があ自分の新婦を見たらどんな批評をすることだろう、何の譬ひゆ諭ゆを用いて言うだろう、自分の行動に目を離さない人であるから、そのうちこの關係に気がつくであろうと思うと源氏は救われがたい気がした。女王が普

通の容貌きりようの女であつたら、源氏はいつでもその人から離れて行つてもよかつたであらうが、醜い姿をはつきりと見た時から、かえつてあわれむ心が強くなつて、良人おととらしく、物質的の補助などもよくしてやるようになった。黒貂くろきの毛皮でない絹、綾あや、綿、老いた女たちの着料になる物、門番の老人に与える物までも贈つたのである。こんなことは自尊心のある女には堪えがたいことに違いないが常陸ひたちの宮の女王はそれを素直に喜んで受けるのに源氏は安心して、せめてそうした世話をよくしてやりたいという気になり、生活費などものちには与えた。

灯影ほかげで見た空蟬うつせみの横顔が美しいものではなかつたが、姿態の優美さは十分の魅力があつた。常陸ひたちの宮の姫君はそれより品の悪



いはずもない身分の人ではないか、そんなことを思うと上品であるということは身柄によらぬことがわかる。男に対する洗練された態度、正義の観念の強さ、ついには負けて退却をしたなどと源氏は何かのことにつけて空蟬が思い出された。

その年の暮れの押しつまったところに、源氏の御所の宿直所とのいどころへ大輔たゆうの命婦みょうぶが来た。源氏は髪を梳すかせたりする用事をさせるのには、恋愛関係などのない女で、しかも戯談じょうだんの言えるような女を選んで、この人などがよくその役に当たるのである。呼ばれない時でも大輔はそうした心安さからよく桐壺きりつぼへ来た。

「変なことがあるのでございますがね。申し上げないでおりますのも意地が悪いようにとられることですし、困ってしまつて上が

つたのでございます」

ほほえみ  
微笑を見せながらそのあとを大輔は言わない。

「なんだろう。私には何も隠すことなんかない君だと思っているのに」

「いいえ、私自身のことでもございましたら、もったいないことですがあなたが様に御相談に上がって申し上げます。この話だけは困ってしまいました」

なお言おうとしないのを、源氏は例のようにこの女がまた思わせぶりを始めたと見ていた。

「常陸の宮から参ったのでございます」

こう言つて命婦は手紙を出した。

「じや何も君が隠さねばならぬわけもないじやないか」

こうは言つたが、受け取つた源氏は当惑した。もう古くて厚ぼつたくなつた檀紙だんしに薰香くんこうのにおいだけはよくつけてあつた。ともかくも手紙の体ていはなしているのである。歌もある。

唐衣からころも 君が心のつらければ袂たもとはかくぞそぼちつのみ

何のことかと思つていると、おおげさな包みの衣裳箱いしやうばこを命婦は前へ出した。

「これがきまり悪くなくてきまりの悪いことつてございませんでしよう。お正月のお召めしにというつもりでわざわざおつかわしにな

ったようでございますから、お返しする勇氣も私にございませぬ。私の所へ置いておきましても先様の志を無視することになるでしょうから、とにかくお目にかけてから処分をいたすことにしようと思うのでございます」

「君の所へ留めて置かれたらたいへんだよ。着物の世話をしてくれる家族もないのだからね、御親切をありがたく受けるよ」

とは言ったが、もう戯じょうだん談も口から出なかつた。それにして

もまずい歌である。これは自作に違いない、侍従がおれば筆を入れるところなのだが、そのほかには先生はないのだからと思うと、その人の歌作に苦心をする様子が想像されておかしくて、

「もつたいない貴婦人と言わなければならぬのかもしれない」

と言いながら源氏は微笑して手紙と贈り物の箱をながめていた。  
 命婦は真赤まっかになつていた。臙脂えんじの我慢のできないようないやな色  
 に出た直衣のうしで、裏も野暮やぼに濃い、思いきり下品なその端々が外か  
 ら見えているのである。悪感を覚えた源氏が、女の手紙の上へ無む  
 駄書だきをするようにして書いているのを命婦が横目で見てみると、

なつかしき色ともなしに何にこの末摘花すゑつむはなを袖そでに触れけん

色濃き花と見しかども、とも読まれた。花という字にわけがあ  
 りそうだと、月のさし込んだ夜などに時々見た女王の顔を命婦は  
 思い出して、源氏のいたずら書きをひどいと思ひながらもしまい

にはおかしくなった。

「くれなるのひとはな衣ごろもうすくともひたすら朽たす名をし立て  
ずば

その我慢も人生の勤めでございますよ」

理解があるらしくこんなことを言っている命婦もたいした女ではないが、せめてこれだけの才分でもあの人になればよかったと源氏は残念な気がした。身分が身分である、自分から捨てられたというような気の毒な名は立てさせたくないと思うのが源氏の真意だった。ここへ伺候して来る人の足音がしたので、

「これを隠そうかね。男はこんな真似まねも時々しなくてはならないのかね」

源氏はいまいましたそうに言った。なぜお目にかけたろう、自分でが浅薄な人間に思われるだけだったと恥ずかしくなり命婦はそつと去ってしまった。

翌日命婦が清涼殿に出ていると、その台盤だいばんどころ所を源氏がのぞいて、

「さあ返事だよ。どうも晴れがましくて堅くなつてしまったよ」

と手紙を投げた。おおぜいいた女官たちは源氏の手紙の内容をいろいろに想像した。「たたらめの花のごと、三笠みかさの山の少女をとめをば棄すてて」という歌詞を歌いながら源氏は行つてしまった。また

赤い花の歌であると思うと、命婦はおかしくなつて笑つていた。理由を知らない女房らは口々に、

「なぜひとり笑いをしていらつしやるの」と言つた。

「いいえ寒い霜の朝にね、『たたらめの花のごと搔練かいねり好むや』という歌のように、赤くなつた鼻を紛らすように赤い搔練を着ていたのをいつか見つかったのでしょうか」

と大輔の命婦が言うと、

「わざわざあんな歌をお歌いになるほど赤い鼻の人もここにはいないでしょう。左近さこんの命婦さんか肥後ひごの采女うねめがいつしよだったのでしょうか、その時は」



などと、その人たちは源氏の謎なぞの意味に自身らが関係のあるようにもないようにも言つて騒いでいた。

命婦が持たせてよこした源氏の返書を、常陸ひたちの宮では、女房が集まつて大騒ぎして読んだ。

逢あはぬ夜を隔つる中の衣ころも手に重ねていとど身も沁しみよとや

ただ白い紙へ無造作むぞうさに書いてあるのが非常に美しい。

三十日の夕方に宮家から贈つた衣箱の中へ、源氏が他から贈られた白い小袖こそでの一重ね、赤紫の織物うわぎの上衣、そのほかにも山吹やまぶき色とかいろいろな物を入れたのを命婦が持たせてよこした。

「こちらでお作りになったのがよい色じやなかったというあてつけの意味があるのではないでしょうか」

と一人の女房が言うように、だれも常識で考えてそうとれるのであるが、

「でもあれだつて赤くて、重々しいできばえでしたよ。まさかこちらの好意がむだになるといふことはないはずですよ」

老いた女どもはそう決めてしまった。

「お歌だつて、こちらのは意味が強く徹底しておできになつていましたよ。御返歌は技巧が勝ち過ぎてますね」

これもその連中の言うことである。すえつむはな末摘花も大苦心をした結晶であつたから、自作を紙に書いておいた。

元三日が過ぎてまた今年は男踏歌おとことうかであちらこちらと若い公きんだ達が歌舞をしてまわる騒ぎの中でも、寂しい常陸の宮を思いやっていた源氏は、七日の白馬あおうまの節会せちえが済んでから、お常御殿を下がって、桐壺きりつぼで泊まるふうを見せながら夜がふけてから末摘花の所へ来た。これまでに変わってこの家が普通の家らしくなくなっていた。女王の姿も少し女らしいところができたように思われた。すっかり見違えるほどの人にできればどんなに犠牲の払いがいがあろうかなどとも源氏は思っていた。日の出るころまでもゆるりと翌朝はとどまっていたのである。東側の妻戸をあけると、そこから向こうへ続いた廊がこわれてしまっているのですぐ戸口から日がはいつてきた。少しばかり積もっていた雪の光も混じ

つて室内の物が皆よく見えた。源氏が直衣のうしを着たりするのをながめながら横向きに寝た末摘花の頭の形もその辺の畳にこぼれ出している髪も美しかった。この人の顔も美しく見うる時が至つたらと、こんなことを未来に望みながら格子こうしを源氏が上げた。かつてこの人を残らず見てしまった雪の夜明けに後悔されたことも思い出して、ずっと上へは格子を押し上げずに、脇きょうそく息をそこへ寄せて支えにした。源氏が髪の乱れたのを直していると、非常に古くなった鏡台とか、支那しな出来の櫛くし箱ばこ、搔かき上げの箱などを女房が運んで来た。さすがに普通の所にはちよつとそろえてあるものでもない男専用の髪道具もあるのを源氏はおもしろく思った。末摘花が現代人風になつたと見えるのは三十日に贈られた衣箱の中

の物がすべてそのまま用いられているからであるとは源氏の気づかないところであつた。よい模様であると思つたうちぎ桂にだけは見覚えのある気がした。

「春になつたのですからね。今日は声も少しお聞かせなさいよ、  
鶯うぐいすよりも何よりもそれが待ち遠しかつたのですよ」

と言うと、「さへづる春は」ももちどりさへづ（百千鳥囀る春は物ごとに改ま  
れどもわれぞ古ふり行ゆく）とだけをやつと小声で言つた。

「ありがとう。二年越しにやつと報いられた」

と笑つて、「忘れては夢かとぞ思ふ」という古歌を口にしながら帰つて行く源氏を見送るが、口を被おおうた袖そでの蔭かげから例の末摘花が赤く見えていた。見苦しいことであると歩きながら源氏は思つ

た。

二条の院へ帰つて源氏の見た、半分だけ大人のよふな姿の若紫がかわいかつた。紅あかい色の感じはこの人からも受け取れるが、こんなになつかしい紅もあるのだつたと見えた。無地の桜色の細長を柔らかに着なした人の無邪氣な身の取りなしが美しくかわいのである。昔風の祖母の好みでまだ染めてなかつた齒を黒くさせたことによつて、美しい眉まゆも引き立つて見えた。自分のすることであるがなぜつまらぬいろいろな女を情人に持つのだろう、こんなに可憐かれんな人とばかりいないでと源氏は思いながらいつものように雛遊ひなびの仲間になつた。紫の君は絵をかいて彩色したりもしてゐた。何をしても美しい性質がそれにあふれて見えるようである。

源氏もいっしょに絵をかいた。髪の毛の長い女をかいて、鼻に紅をつけて見た。絵でもそんなのは醜い。源氏はまた鏡に写る美しい自身の顔を見ながら、筆で鼻を赤く塗ってみると、どんな美貌びぼうにも赤い鼻の一つ混じっていることは見苦しく思われた。若紫が見て、おかしがって笑った。

「私がこんな不具者になったらどうだろう」

と言うと、

「いやでしようね」

と言つて、しみ込んでしまわないかと紫の君は心配していた。

源氏は拭ふく真似まねだけをして見せて、

「どうしても白くならない。ばかなことをしましたね。陛下はど

うおつしやるだろう」

まじめな顔をして言うと、かわいそうでならないように同情して、そばへ寄つて硯すずりの水入れの水を檀紙だんしにしませて、若紫が鼻の紅を拭く。

「平へいちゆう仲ちゆうの話のように墨なんかをこの上に塗つてはいけませんよ。赤いほうはまだ我慢ができる」

こんなことをしてふざけている二人は若々しく美しい。

初春らしく霞かすみを帯びた空の下に、いつ花を咲かせるのかとたよりなく思われる木の多い中に、梅だけが美しく花を持っていて特別なすぐれた木のように思われたが、緑の階はしかく隠かくしのそばの紅梅はことに早く咲く木であったから、枝がもう真赤まっかに見えた。



くれなるの花ぞあやなく疎うとまるる梅の立枝たちえはなつかしけれど

そんなことをだれが予期しようぞと源氏は歎息たんそくした。末摘花、  
若紫、こんな人たちはそれからどうなったか。

(訳注) この巻は「若紫」の巻と同年の一月から始まっ  
ている。



# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：門田裕志

2003年7月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源氏物語

## 末摘花

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>